



研究・教育・普及活動を通じた民族音楽学への貢献 小泉文夫音楽賞授賞式



楽器博物館だより第100号(4月13日発行)でお知らせしましたように、民族音楽学の世界的な賞である「小泉文夫音楽賞」の2014年度受賞者に浜松市楽器博物館が選ばれました。その授賞式が5月21日(木)午後5時から東京都内のLEVEL XXI 東京會館にて行われ、浜松市市民部文化振興担当部長山下文彦氏と当館館長の嶋和彦が出席しました。

小泉文夫音楽賞は、世界の民族音楽の研究に生涯をささげた東京芸術大学教授の故小泉文夫氏(1927～1983)を記念して、夫人の故小泉美枝子氏が1989年に設定したもので、民族音楽学の分野でユニークな音楽研究や音楽活動をした個人または団体の業績を顕彰するものです。毎年1～2人の受賞者が世界中から選ばれます。

今回の受賞者は、上海音楽学院音楽学系教授の陳応時(中国の楽律学の研究、ならびに琵琶古譜とりわけ敦煌琵琶譜の解読研究の功績に対して)と当館(楽器博物館として研究・教育・普及活動に取り組み、民族音楽学に大きく貢献したことに対して)の2人。

過去の受賞者はロベルト・ガルファイス(カリフォルニア大学教授・2013年)オペラシアターこんにやく座(東京・2013年)

マリー・シェーフアー(トロント大学教授・2012年)イザベラ・ゼムツォーフスキイ(スタンフォード大学元教授・2011年)李輔亨(韓国古音盤研究会会長・2011年)沈洽(中国音楽学院教授・2010年)チャールズ・カイル(ニューヨーク州立大学名誉教授・2010年)川田順三(2001)徳丸吉彦(1998)山口修(1998)中川真(1992)ホセ・マセダ(フィリピン・1991)東儀季信(1990)国立音楽大学楽器資料館(1990)ジョン・ブラッキング(1989)ら36人。

授賞式では海老澤敏運営委員長の挨拶のあと、海老澤委員長より両者に賞状と懸賞金が贈呈されました。続いて受賞者による記念講演が行われました。「小泉文夫先生が促された日中間の学術交流」と題した陳氏の講演の後、「博物館に“命”を与える試み～浜松市楽器博物館の20年～」と題して嶋館長がこれまでの博物館の取り組みを発表しました。その中で嶋館長は「この賞は、博物館が単独でいただいたものではなく、これまで博物館の活動を支えてくださった多くの方々、とりわけ、演奏家や研究者の皆さんの研究成果を博物館が使わせていただいたお蔭ですから、そのすべての方に対する賞であると思います。博物館が代表として受け取ったにすぎません。」と感謝の気持ちを述べました。

浜松市楽器博物館について（授賞式プログラムより）

平成7年（1995）に日本で初めての公立楽器博物館として開館した浜松市楽器博物館は、単に楽器の蒐集、収蔵、修復、記録、展示といった通例の博物館業務を超えて、音楽文化の多様性、深さを様々な媒体（CD、DVD、図録）やイベント（レクチャーコンサート、イブニングサロン、歴史・文化講座、ワークショップ、移動博物館、ドキュメンテーション）を通して多角的に情報を発信している点で、世界でも稀有な楽器専門の博物館です。開館時には計700点であった所蔵楽器も現在では3300点となり、うち1300点が常設展示されています。この博物館のポリシーは「楽器に命を与え、生きた博物館を創造する」というものです。小泉文夫音楽賞委員会は、上記の膨大な諸活動とともに、このポリシーが生き生きと実現されている点を高く評価しました。

楽器博物館はヨーロッパで19世紀に登場しましたが、所蔵の中心はヨーロッパの楽器であり、非ヨーロッパの楽器は民族楽器という枠組みのなかで周縁に位置づけられました。その観点は比較音楽学の初期の考え方と関係あるといえるでしょう。また、非ヨーロッパ地域にある楽器博物館でも自国・自民族の楽器展示が中心で、それ以外の楽器の収集は極めて低調となっています。つまり収集方針に自国あるいは自文化中心の偏向が内在しているのです。浜松市楽器博物館はそういった従来の傾向とは大きく一線を画し、文化人類学的な認識にたって自文化・異文化を問わず、相対主義的な目線からできる限り平等に扱おうとしています。何千という部品からなる複雑な楽器も、たった1本の竹でできた楽器も、文化の産物としては同等の価値をもつという視点です。浜松市楽器博物館はそういう視点をもつ世界で初めての楽器博物館であるところに価値があります。

しかし、そのためには楽器の背後にある宇宙観、宗教、科学技術、自然環境などを説明する必要があります。コンサートやワークショップ、講座やCD、DVDといった多彩なアウトリーチ活動は、この要請に従って次から次へと誕生していったのです。楽器を切り口として、文化や経済、さらには世界や環境へと私たちの眼差しを広げ、壮大な物語へと導いていく点で、この博物館の存在意義、奥深さが認められます。この博物館自体がひとつの「宇宙」といっても過言ではないのです。

一連の諸活動は社会から高く評価され、なかでもCD第38巻「イギリス・ソナタ・ブロードウッド・ピアノ 新世紀の響き」が平成24年度の文化庁芸術祭レコード部門大賞を受賞したのは特筆に値します。1802年製のフォルテピアノによる演奏によって、デュッセックやベートーヴェンらの作品に別の輝きをもたらされました。ビジネス的な観点からすると二の足を踏むような、博物館ならではの文化的冒険がここにあります。また、平成26年度には嶋和彦館長の博物館研究の報告が日本博物館協会活動奨励賞を受賞したほか、平成25年のThe Best in Heritage Meeting（ドゥブロブニク）、平成26年のCIMCIM年次会議（ストックホルム等）の講演に招かれるなど内外で大きな注目を浴びています。

博物館というハコモノを拠点に、物質文化としての楽器展示と同時に、極めて多様多彩なチャンネル・媒体を駆使し、精神文化としての世界の諸民族の音楽の特質を明示し、ここを訪れる一般の市民と専門的な研究者に常に刺激を与え続けている点で、小泉文夫音楽賞の受賞にふさわしいといえます。そして、その充実したプログラム形成には、館長である嶋和彦氏ならびに有能なスタッフ、そして設置者である浜松市の貢献が大きいと考えられます。



小泉文夫音楽賞

浜松市楽器博物館殿

あなたは民族音楽学の研究と振興に殊の貢献をされました
ここにその業績をたたえ、小泉文夫音楽賞を贈呈いたします

平成27年 5月21日
公益信託小泉文夫記念民族音楽基金
運営委員長 海老澤 敏
受託者 みずほ信託銀行株式会社
取締役社長 中野武夫

*Hoizumi Junio Prize for Ethnomusicology
Awarded to Hamamatsu Museum of Musical Instruments
We here by award you the Hoizumi Junio Prize for
Ethnomusicology in recognition of your significant
contributions to the field
Awarded on the Twenty-first of May, 2015
Charitable Trust
Hoizumi Junio Memorial Foundation for Ethnomusicology
Commissioner Aoi Ebisawa
Trustee: Mizuho Trust & Banking Co., Ltd
President J. Nakano*

小泉文夫 (1927 ~ 1983)

東京出身。府立四中を経て東京大学文学部美学科へ入学。在学中に日本音楽学に関心を持つ。卒業後は、東京大学大学院人文科学研究科美学専攻課程に籍を置きながら平凡社に勤務。邦楽や東南アジアや中近東、アフリカ音楽に興味をもち、日本の伝統音楽の研究や NHK 交響楽団機関誌の編集委員などを務めた。1957 年にインドに留学しインドの古典音楽や民族音楽の調査を行う。1959 年から東京芸術大学の教員となり、日本を始めとして、世界中の民族音楽の調査や研究に従事。その傍ら、NHK-FM の「世界の民俗音楽 (後の「世界の民族音楽」)」の番組の担当や、NET (現テレビ朝日) の「世界の音楽」などにも出演するようになる。1975 年に東京芸術大学教授に就任したが、多忙により癌の発見治療が遅れ、1983 年 8 月 20 日、肝不全のため 56 歳の若さで没した。美智子皇太子妃 (当時) や吉永小百合をはじめ多くの著名人にもファンがおり、その早い死を惜しんだ。



欧米系の音楽中心であった日本の音楽界において民族音楽の地位を向上させ、およそ 30 年もの間、テレビやラジオを通じて多くの人に民族音楽の紹介や啓蒙を行なった。没後にキングレコードで、小泉監修による CD『世界民族音楽集』が出されている。2002 年に<CD71 枚組・732 曲>で同社で『小泉文夫の遺産～民族音楽の礎』が、また 1995 年にコロムビアより『アジアの響き 小泉文夫記念音楽会ライブ』が出された。

著書に『日本伝統音楽の研究』音楽之友社 1958、『おたまじゃくし無用論 音楽が好きになる本』いんなあととりっぷ 1973、『日本音楽の再発見』團伊玖磨対談 講談社現代新書 1976、平凡社ライブラリー 2001、『世界の民族音楽探訪 インドからヨーロッパへ』実業之日本社 1976、『音楽の根源にあるもの』青土社 1977、平凡社ライブラリー 1994、『空想音楽大学』青土社 1978、『エスキモーの歌 民族音楽紀行』青土社 1978、他多数。また編集や解説に携わった CD や DVD も多数。

受賞者一覧

- 第 26 回 2014 年度 陳応時 (上海音楽学院音楽学系教授) 浜松市楽器博物館
- 第 25 回 2013 年度 ロベルト・ガルフィアス (カリフォルニア大学アーヴァイン校教授) オペラシアターこんにゃく座
- 第 24 回 2012 年度 R. マリー・シェーファー (トロント大学ロイヤル音楽院グレン・グールド・スクール教授、作曲家)
- 第 23 回 2011 年度 イザベリイ・ゼムツォーフスキイ (スタンフォード大学音楽学部及びスラヴ学学部 元客員教授) 李輔亨 (韓国古音盤研究会会長)
- 第 22 回 2010 年度 沈洽 (中国音楽学院教授) チャールズ・カイル (ニューヨーク州立大学バッファロー校名誉教授)
- 第 21 回 2009 年度 バーバラ・バーナード・スミス (ハワイ大学マノア校名誉教授) ジョーゼフ・ジョルダーニア (メルボルン大学名誉研究員、トビシン音楽院教授、同伝統多声楽研究センター国際部長)
- 第 20 回 2008 年度 蒲生郷昭 (東京文化財研究所名誉研究員) シムハ・アロム (フランス国立科学研究センター名誉研究部長)
- 第 19 回 2007 年度 ユリ・シェイキン (国立極地芸術・文化学院教授) ジェラルド・グロマー (山梨大学教授)
- 第 18 回 2006 年度 クリステル・マルム (エーテボリ大学教授)
- 第 17 回 2005 年度 イ・マデ・バンデム (インドネシア芸術大学ジョクジャカルタ校学長)
- 第 16 回 2004 年度 山田陽一 (京都市立芸術大学教授)
- 第 15 回 2003 年度 スティーヴン・フェルド (ニューメキシコ大学教授)
- 第 14 回 2002 年度 月溪恒子 (大阪芸術大学教授)
- 第 13 回 2001 年度 川田順造 (広島市立大学教授)
- 第 12 回 2000 年度 間宮芳生 (桐朋学園大学特任教授・作曲家)
- 第 11 回 1999 年度 藤井知昭 (中部大学中部高等学術研究所教授・同研究所副所長)
- 第 10 回 1998 年度 徳丸吉彦 (お茶の水女子大学教授) / 山口修 (大阪大学教授)
- 第 9 回 1997 年度 ジャン＝ジャック・ナティエ (モンリオール大学教授)
- 第 8 回 1996 年度 谷本一之 (北海道立アイヌ民族文化研究センター所長)
- 第 7 回 1995 年度 黄翔鵬 (中国芸術研究院音楽研究所元所長)
- 第 6 回 1994 年度 チャン・ヴァン・ケー (ソルボンヌ大学名誉教授・フランス国立センター元研究所長)
- 第 5 回 1993 年度 ブルーノ・ネトル (イリノイ大学名誉教授)
- 第 4 回 1992 年度 ウィリアム P. マルム (ミシガン大学教授) 中川真 (京都市立芸術大学助教授)
- 第 3 回 1991 年度 ホセ・マセダ (フィリピン大学名誉教授) 井野辺潔 (大阪音楽大学教授)
- 第 2 回 1990 年度 東儀季信 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校講師・雅楽演奏家) 国立音楽大学楽器資料館
- 第 1 回 1989 年度 ジョン・ブラッキング (ベルファスト・クィーンズ大学名誉教授) 東京芸術大学民族音楽ゼミナール

第170回 レクチャーコンサート

「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード・敦煌から正倉院へ～」

当館の開館 20 周年記念レクチャーコンサートのテーマの一つは「日本、アジア、そして世界」です。今回はその第一弾として、日本とアジアのつながり、そして古代シルクロードの音色を探るコンサートを開催しました。法政大学教授のステューヴン・G・ネルソン先生と、日本を代表する雅楽演奏グループの一つである伶楽舎の皆さんをお招きしました。

ネルソン先生は中国の敦煌・莫高窟で発見された「敦煌琵琶譜」や、世界最古の琵琶譜である正倉院の「天平琵琶譜」など、古楽譜を解読する研究をされています。千年以上前に書かれ一部分しか現存していない古楽譜から当時の音楽を復元するのは、様々な文献を突き合わせて解読したり、演奏家と相談したりと、手探りで進める大変困難な作業であるといえます。今回はそのような貴重な研究成果から 5 曲を取り上げ、先生が 1 曲ずつ解説し、伶楽舎に再現演奏していただきました。

演奏には、現在の雅楽の楽器に加え、現在では使われていないシルクロード起源の楽器の復元楽器も使われました。唐の玄宗皇帝の時代の五絃譜を元にした「上元楽」では、古代西アジアで生まれたハーブの箏篋（くご）、世界で唯一正倉院にのみ現存する、インド起源の五絃琵琶、そしてパンパイプの排簫（はいしょう）や昨年初めて

復元された措鼓（かいこ / 鼓面をこすって鳴らす太鼓）が使われ、全部で 11 種の楽器による大合奏となりました。雅楽の楽器に復元楽器の音色が加わった豊かな響きに、会場のお客様はうっとりとして聴き入っていました。



日時：平成 27 年 5 月 24 日（日）15:00～16:45
会場：アクトシティ浜松 音楽工房ホール
出演：ステューヴン・G・ネルソン（お話） 伶楽舎（演奏）
入場者：96 人

博物館日誌

- 5/24（日）レクチャーコンサート
「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード・敦煌から正倉院へ～」
15:00 音楽工房ホール
出演：ステューヴン・G・ネルソン、伶楽舎
入場者：96 人
- 5/27（水）レクチャーコンサート＜フォルテピアノとその時代 第3回＞
「奏でる喜びをともに～エラル・ピアノと人生の煌めき～」
19:00 天空ホール 出演：荒川智美、山澤慧
入場者：61 人
- 6/2（火）～3（水）移動楽器博物館 浜松市立三ヶ日東小学校
6/4（木）～5（金）移動楽器博物館 浜松市立尾奈小学校
6/10（水）レクチャーコンサート＜フォルテピアノとその時代 第4回＞
「情熱と驕りのフォルテピアノ～イタリア・スペインの遺産から～」
19:00 天空ホール 出演：川口成彦 入場者：50 人
- 6/13（土）日本リードオルガン協会 20 周年記念・浜松大会
「足踏みオルガン昨日・今日、そして明日へ」
公開講座「山葉オルガン創業の頃」10:00 研修交流センター
講師：武石みどり / 受講者：149 人
公開演奏会「リードオルガン・浜松からのメッセージ」
13:30 音楽工房ホール 出演：上畑正和、伊藤園子、
中村証二、鈴木開、エヴァルト・ヘンゼラー、大津磨由美、
鈴木重子、名倉亜矢子 入場者：190 人
- 6/14（日）特別展
20 周年記念「リードオルガンがくれた幸せ
～近代日本の洋楽と学校教育と浜松～」終了
期間中入館者数：11,701 人
- 6/14（日）ミニコンサート「リードオルガン」
13:30 出演：浅野成子 入場者：50 人
14:30 出演：伊藤依子 入場者：40 人
15:30 出演：中村証二 入場者：35 人
- 6/16（火）～18（木）移動楽器博物館 浜松市立富塚西小学校

これからの催し物

- 展示室ガイドツアー 毎日曜日 展示品の解説
※催し物により変更もあります
- ギャラリートーク 毎日数回 展示品の解説を行います
- 特別展 20 周年記念「楽器博物館の 20 年～日本から世界へ～」
8/1（土）～1/11（月）
- レクチャーコンサート
「麗しきウィーン～吹奏楽とトランペット・コーア」
9/27（日）14:00 音楽工房ホール
出演：カール・ヤイトラー（指揮）、天竜楽友吹奏楽団、
浜松トランペット・コーア
- 講座「楽器の中の聖と俗」
エストニア・ラトビア・リトアニア～森と湖、バルトの歌ごころ～（全 3 回）
9/4（金）「歌声が人々の絆」
9/18（金）「おもてなしのフォークダンス」
10/2（金）「楽器を作る、奏でる」
講師：西岡信雄 いずれも 19:00～20:30 展示室
- ミニコンサート 14:00&15:30 天空ホール
7/25（土）「オカリナ」出演：音心（えんじろう、亮子）
8/1（土）「クラリネット、ヴァイオリン、ピアノ」
出演：廣川直子ほか
8/8（土）「クラリネットアンサンブル」
出演：浜松クラリネット・クワイアー
8/9（日）「サクソファンアンサンブル」
出演：浜松サクソファンクラブ
8/12（水）「スチールパン」出演：松井奈都子、木村智穂
8/15（土）「南米の楽器アルパ」出演：長嶋忠之ほか
8/16（日）「サクソフォン」出演：坂本佐智子ほか（14:30、15:30）
8/23（日）「金管アンサンブル」
出演：ハママツプラスアンサンブル
9/23（水）「スチールパン」出演：松井奈都子、伊澤陽一

浜松市楽器博物館だより

平成 27 年 6 月 20 日発行 No.102 編集 浜松市楽器博物館
〒430-7790 浜松市中区中央 3-9-1 TEL 053-451-1128 FAX 053-451-1129
URL <http://www.gakkihaku.jp/>